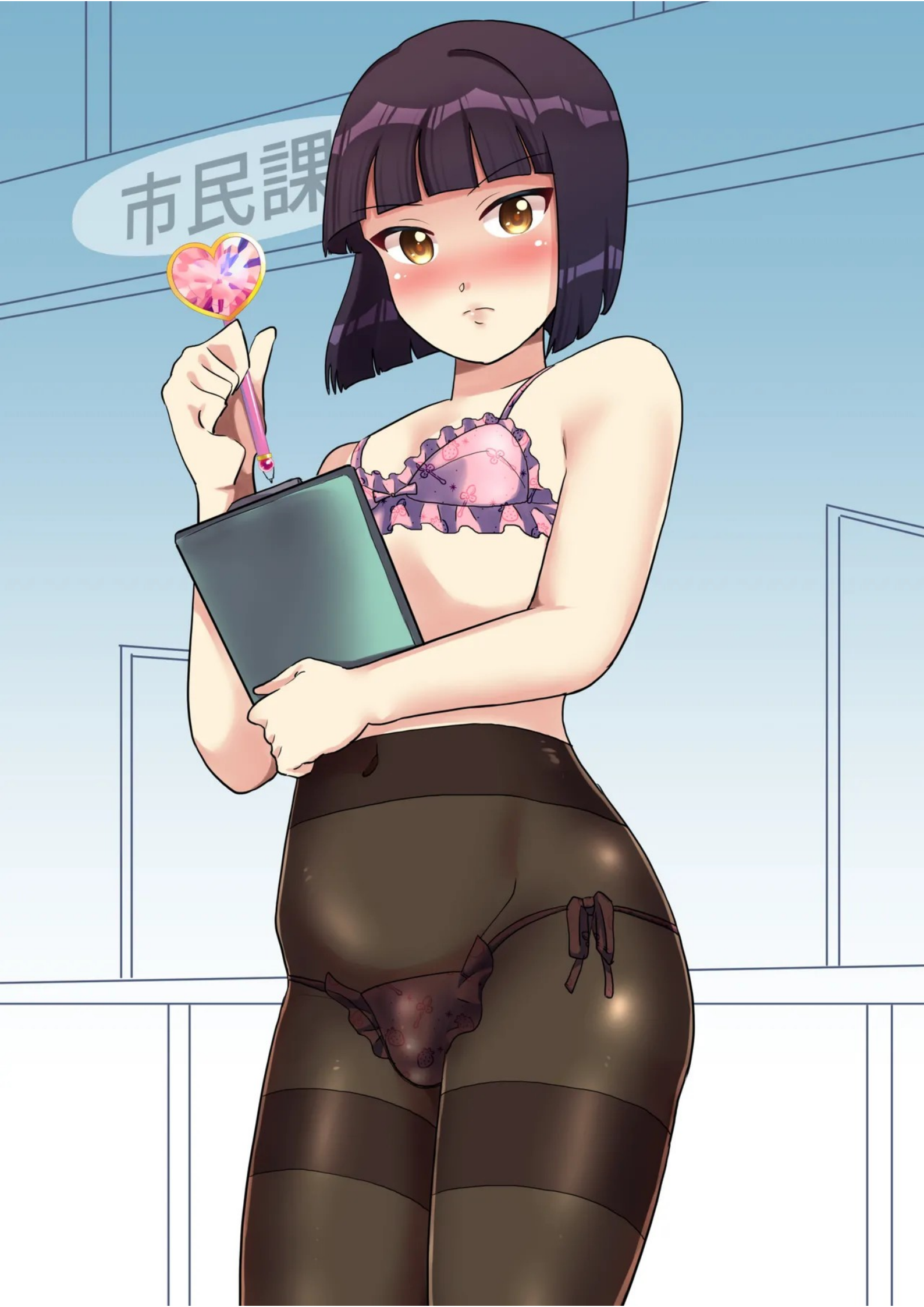
おいでよ!
男の娘村

市民課


市民課

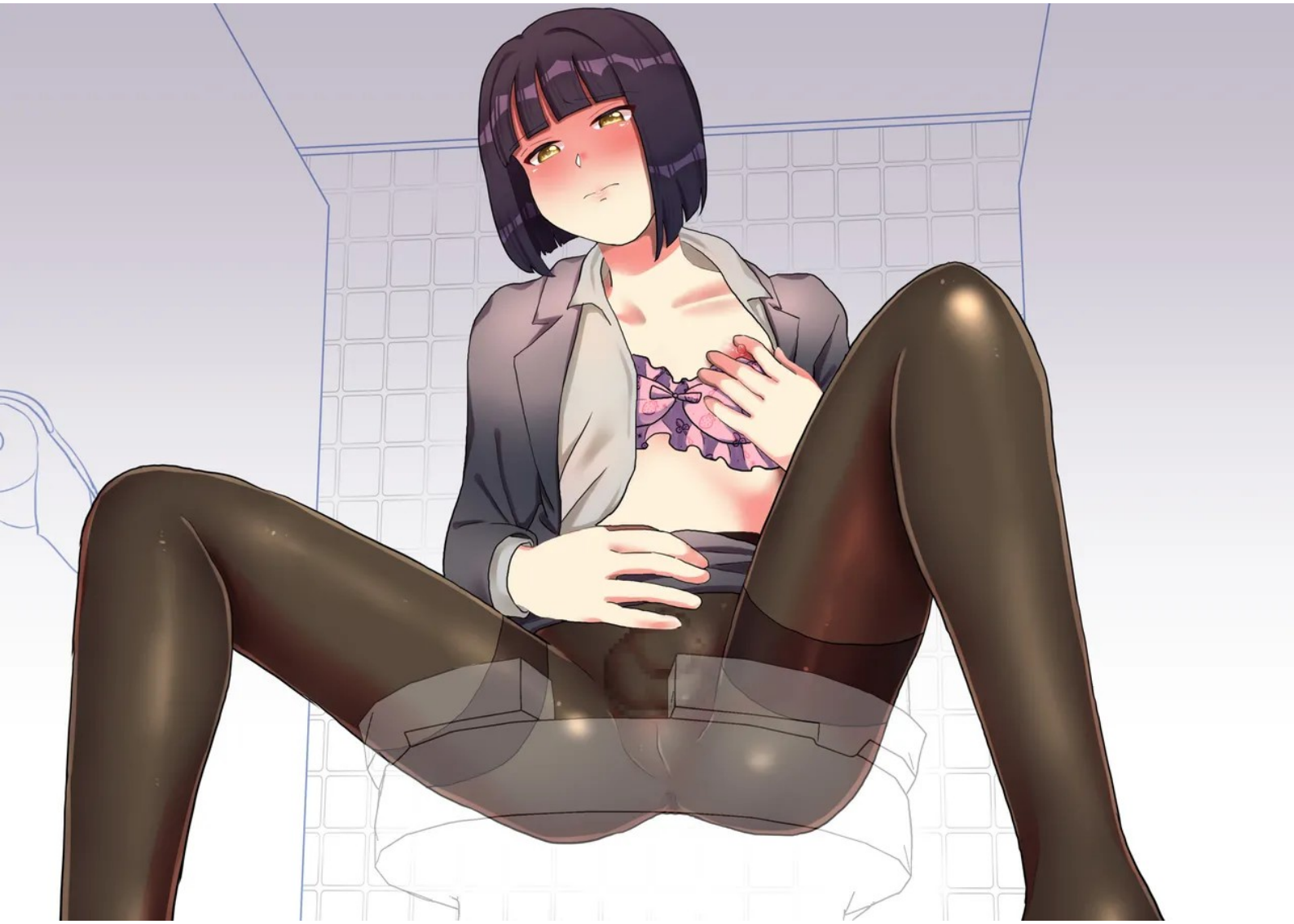
市民課

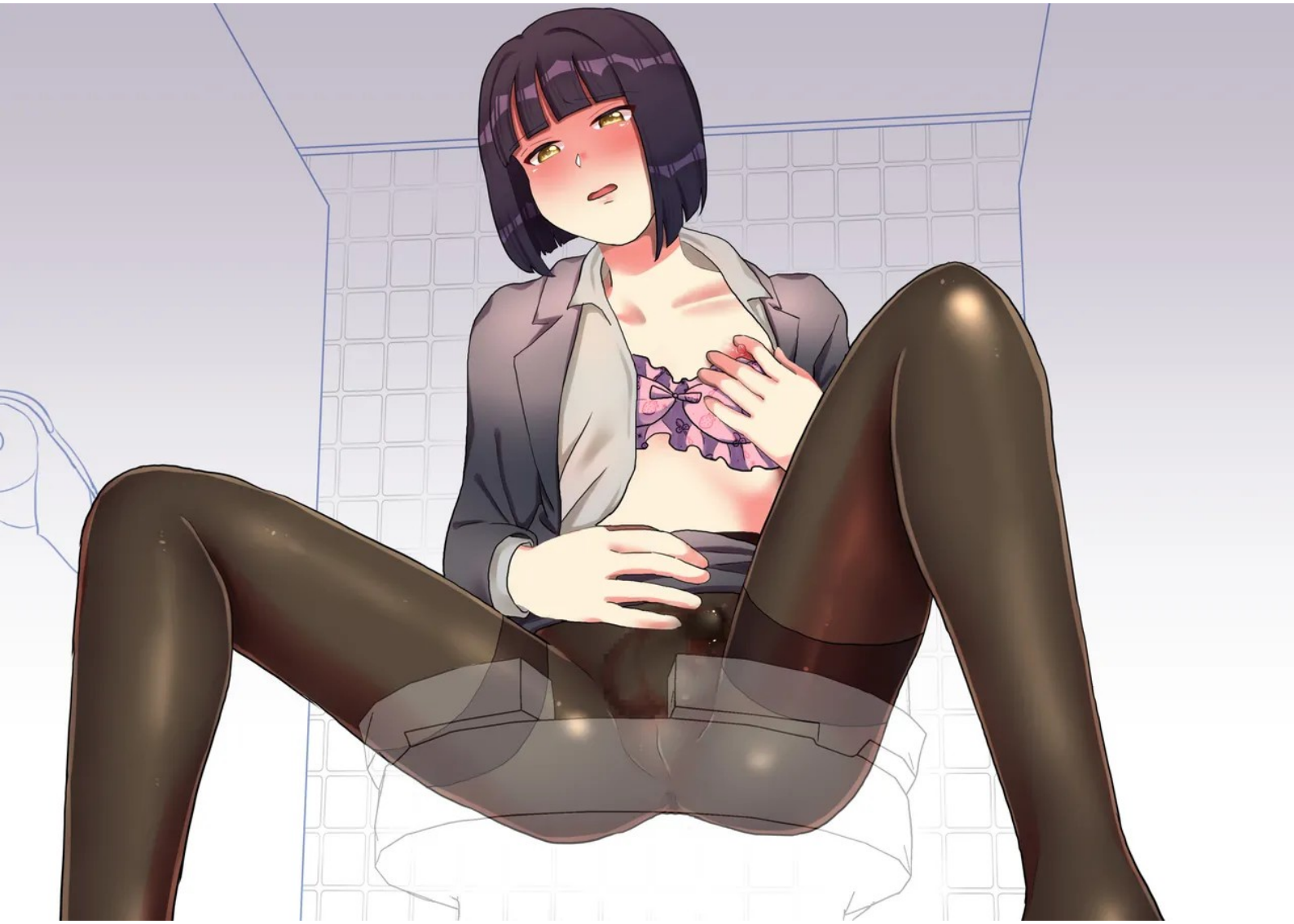
市民課

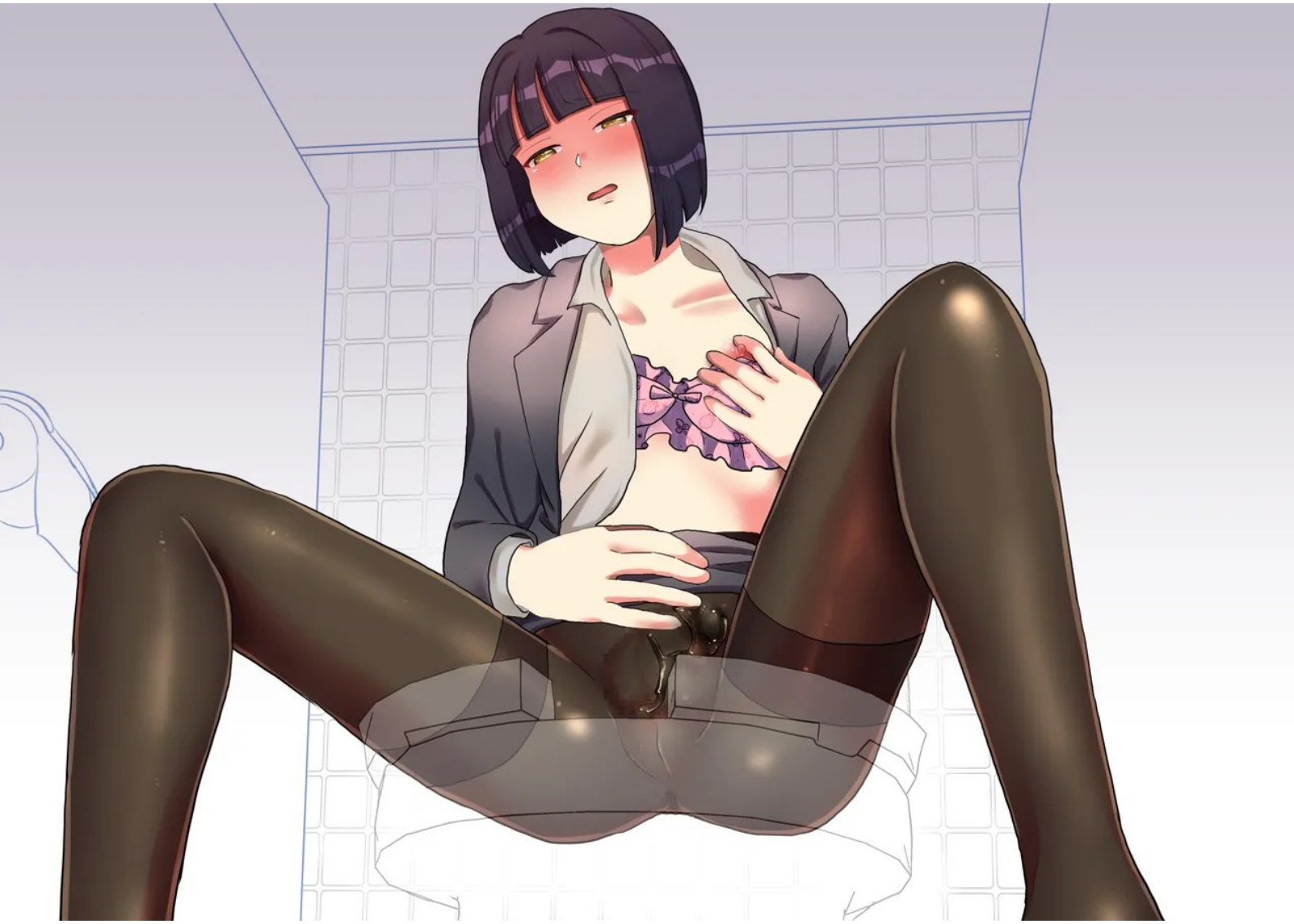
市民課

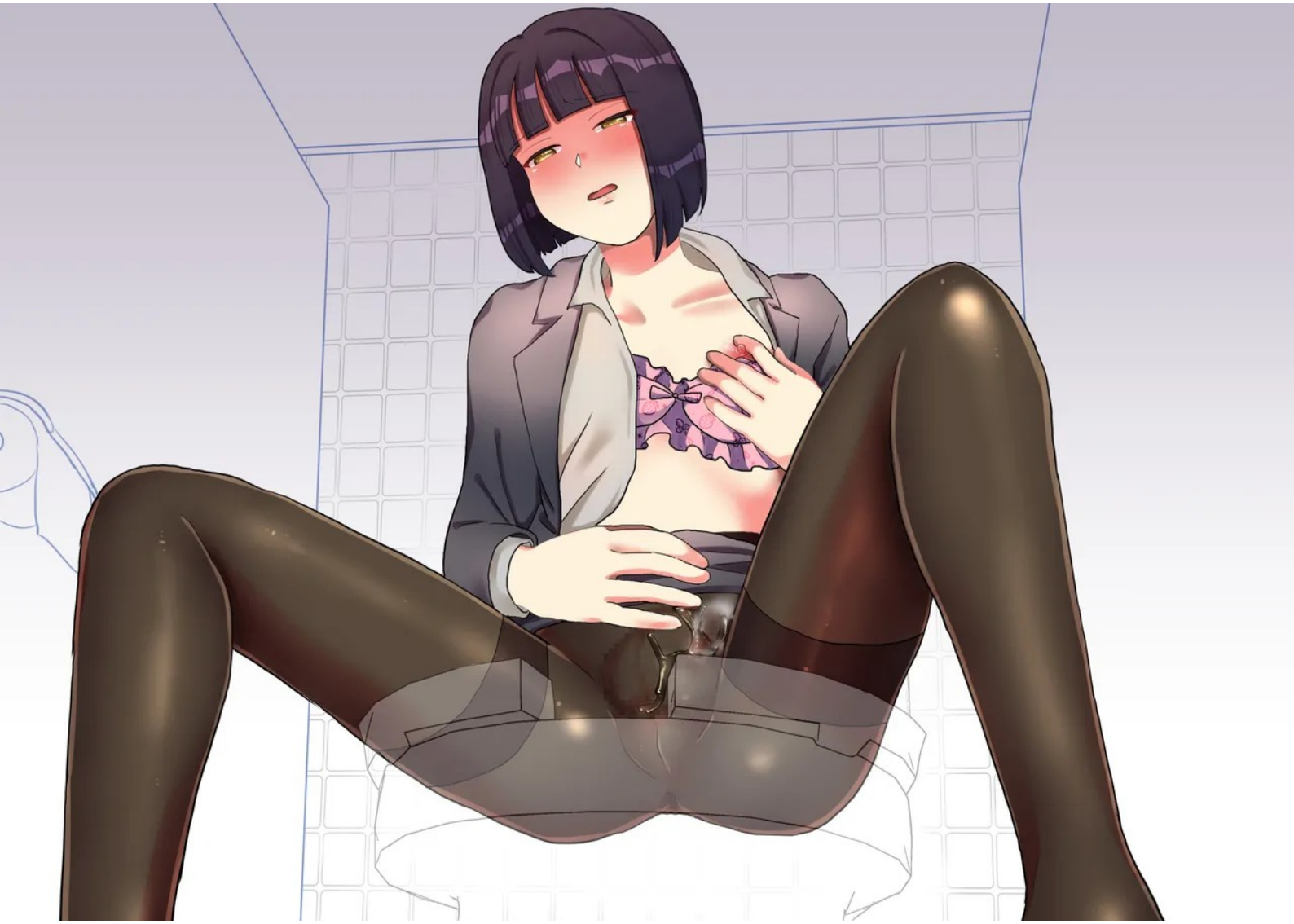
市民課

市民課









生活課

生活課

生活課

俺の名前は多田。

そしてここは市役所・・・、

『男の娘村』の市役所だ・・・。

『男の娘村』とは、体の性別が男性、あるいは・・・、

「こんにちは。あなたが多田さん？
私は生活課の叶です。
移住プログラムの転入者は生活課へお願いします。」
「(うっ!!…か、かわいい…!?なんだこの人…！本当に男か…？)」
「あの…？」
「あっ…はは、すいません…、行きます行きます…」
「ではついて来てください。」
そう、この村には、
男性か、男の娘しか存在しないのだ…。
「(それにしてもすごい、めちゃくちゃかわいいし…、
めちゃくちゃタイプだ…このツンとした態度堪らないな…)」

俺はあまりに信じがたい光景に、これを聞かずにはいられなかった。
「あの・・・叶・・・さんは、本当に男性なんですか・・・？」
すると、なんだか少しムッとした表情をしたので、
「あっ！いえ、すいませんでした・・・、だ、男性にはとても見えなくて・・・」
「・・・そう・・・ですか、わかりました。」
「え、あ・・・はい・・・（わかりました・・・？）」
俺はもう要らない事は言わないよう、叶さんの後を黙ってついて行った。
タイトなスカートに包まれたお尻が左右に揺れる様が、
無茶苦茶エロくて、つい見入ってしまった・・・。
今更だが、俺は童貞だ・・・童貞で、ニートだった・・・。
だからこの村の『移住プロジェクト』で職を見つけ、女性は無理だったが、
女性に近い男の娘で童貞を卒業するのが目的なんだ・・・!!

しばらくついていくと、何故か市役所内を抜けて、
誰も居ない倉庫に着いた。
「あれ…？ここは…」
「さっき、私が本当に男性かどうか聞かれましたよね」
「え…？は、はい…それが…？」
「転居者にそう聞かれた場合、確認の義務が生まれるので。」
「確認…？」
「はい、この村には本当に体の性別が男性の者しか住んでいない事を
確認してもらう義務です。」

「確認って…ど、どうやって…」
「私の体を見てもらいます。」
「えっ!?ここで脱ぐって事ですか!?そ、そんな事までしなくても…！」
「この課で働くという事は、そういう事ですから。
転居者の方に安心して頂く為に仕方のない事です。」
叶さんはそう言って洋服を脱ぎ始めた。

「(…あっ！た、確かに、あの膨らみがある…！
やっぱり男の人なんだなあ…)」
俺は少し残念に思った。
大分失礼なことだが、かわいい顔のその下の体には、
ぷるぷるのおっぱいや、ワレメを期待してしまうのだ。

俺が勝手にがっくりきてる間に、
叶さんはタイツを脱ぎ、マジで可愛い下着姿になっていた。
ストリップを見ているような気分だが、大丈夫だろうか。
この人はどこまで脱いでいくつもりなんだろう…。
しかし肌がきれいだ。
太ももやおなかの部分なんか、すごく柔らかそうで
とても男のものとは思えない…。

「《うわ！》」
ブラジャーを外すと、驚く程ピンクでぷるぷるの乳首が現れた。
これがおっぱいか…いや、おっぱい…無いんだけど…、でも、
これはじゅうぶんおっぱいだ…！
また1人で勝手に盛り上がってしまったが、
ここで叶さんの手が止まる。
「…あの、叶さん…？」
「…も、もう…わかったんじゃないですか…」
「《えぇっ⁉そんな‼》」
叶さんには悪いけど、ここまできて最後まで見れないなんて…！
いや取り乱すな、一押しすればこの人はきっと脱いでくれる…。
俺は少し考えて、神妙な面持ちで言った。
「まだ…、わかりませんね。」
叶さんはパンツの紐に手をかけた。

「あの…ちゃんと…男ですから…」
「(うおおおおおおおおおお!!!)」
俺は奇妙な興奮に包まれた。
そして脳内では男の娘の事を、
『女の子におちんちんがついているお得な存在』
として理解したのだった。
「か、叶さん…!」
「は、はい…」
「最後の確認として、触ってみてもいいですか?」
これがマジに最低の一言だった。
叶さんは俺にビンタをくれ、急いで服を着て足早に立ち去った。
俺は、叶さんの全裸を目に焼き付け、仮住まいのアパートへ帰りシコった。三回イった。

一方、立ち去った叶はというと・・・。
「(どうしよう・・・パンツ穿き忘れちゃった・・・)」
いちごの紐パンを忘れてきていた。
因みにその忘れ物パンツは、
多田がしっかりと持ち帰っている。
「(さっきの所に取りに行くのは、まだ多田さんが居たら嫌だし、
でもパンツが無いと・・・)」
そう、彼は、直穿きのタイツがどれ程気持ちイイか知っていた。
「(一回抜いてなんとかしよう・・・)」
叶は、タイツの生地に興奮する性癖を持っていた・・・。
クリクリクリ
すりすり
因みに、乳首も開発済みだ。
彼は、さっさと抜いてしまいたいが為、
手っ取り早く気持ち良くなれるように、
乳首とチンポを同時に弄り回している。

「(あっ…やば、染みが…。
これくらい、拭けばいいか…、
中で出さないようにしなくちゃ…)」
クリ
クリ
クリ
さわ
さわ
じわぁ…♡

ビクッ
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ビクッ
ビクッ
クリ
クリ
クリ
クリ
ぬるぬる
ぬる
ぬる
ぬる
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ

「んぁあっ♥♥」
ビクッ
ビクッ
びくびくっ

「(あ…汚しちゃった…)」
ぶくっ♡
ぶくっ♡

「(うわあ、全然足りないみたい・・・、どうしよう・・・)」
ドキ
ドキ
ドキ
はぁ
はぁ
ギンッ!!
くちゅ

くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ
くちゅ

「ひぁ…っ！」
ビクッッ
ぴゅっぴゅっ

「(ど、どうしよ…いっぱい出ちゃった…、
…お尻も弄りたくなってきちゃったよ…。
絶対ダメなのに…)」
ぐぐぐっ♡
はぁ
はぁ
はぁ
はぁ
ぐぐっ♡
ぐぐっ♡
ぐぐっ♡
ぐぐっ♡
ドロォ

「(ああもう僕なにやってんだろう…、
でも気持ちイイよお…っ
お尻の穴弄るとおちんちん言う事きかなくなる…っ、
射精…止まんないし…、やば…このままじゃ…、)」
ビュッ
ビュッ
ニョ
ニョ
ニョ
ニョ
ぬるっ
ぬるっ
ぬるっ
ぬるっ
ガクッ
ガクッ
ガクッ
ガクッ

「《うあっ、やばい……！出るっ、
出る出る出ちゃう……、う……、
潮……噴……く……っ！》」
ショ
ショ
ショ
ショ
ショ
ショ
ショ
ガク
ガクッ
ガクッ
ガク
くぽっ
くぽっ
くぽっ
くぽっ
くぽっ
くぽっ

びっ
びっ
ぷしゃあああ
ガッ
「うぅぅ…っ♥！」
びくっ♡
びくびくっ
きゅうぅん♡
ガク
ガク
彼は盛大に潮を噴き、これまた盛大にトイレを汚し、
タイツも汚しフルチンでトイレ掃除をし、
そのまま仕事に戻った…。

「(今まで気が付かなかったけど、このスカートって…けっこう短い…?)」
尋常じゃない程スースーしながら、定時後の残業まで仕事を頑張った。

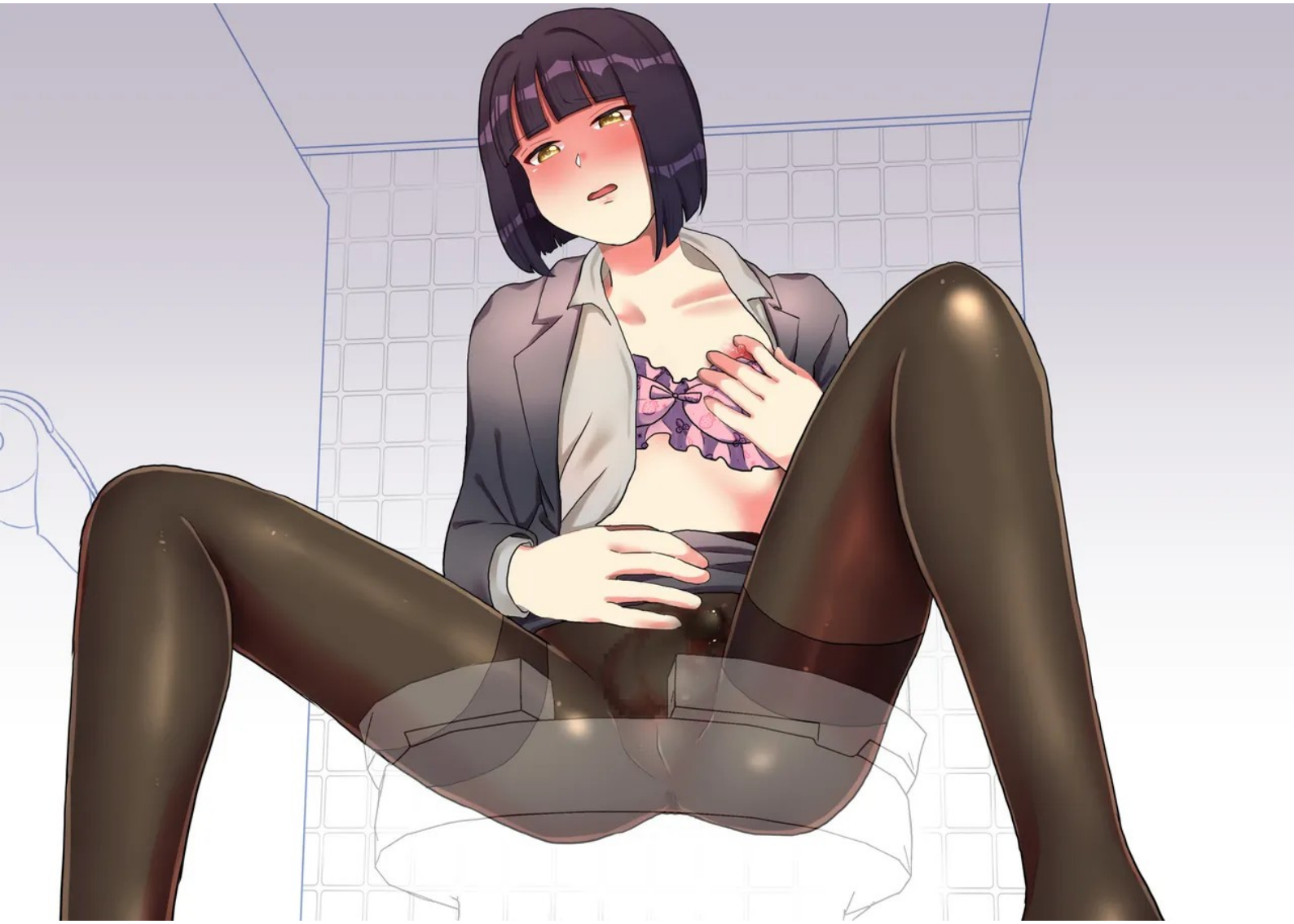
更にそのまま晩御飯の買い物まで行き、新しい性癖に目覚めるところだった。

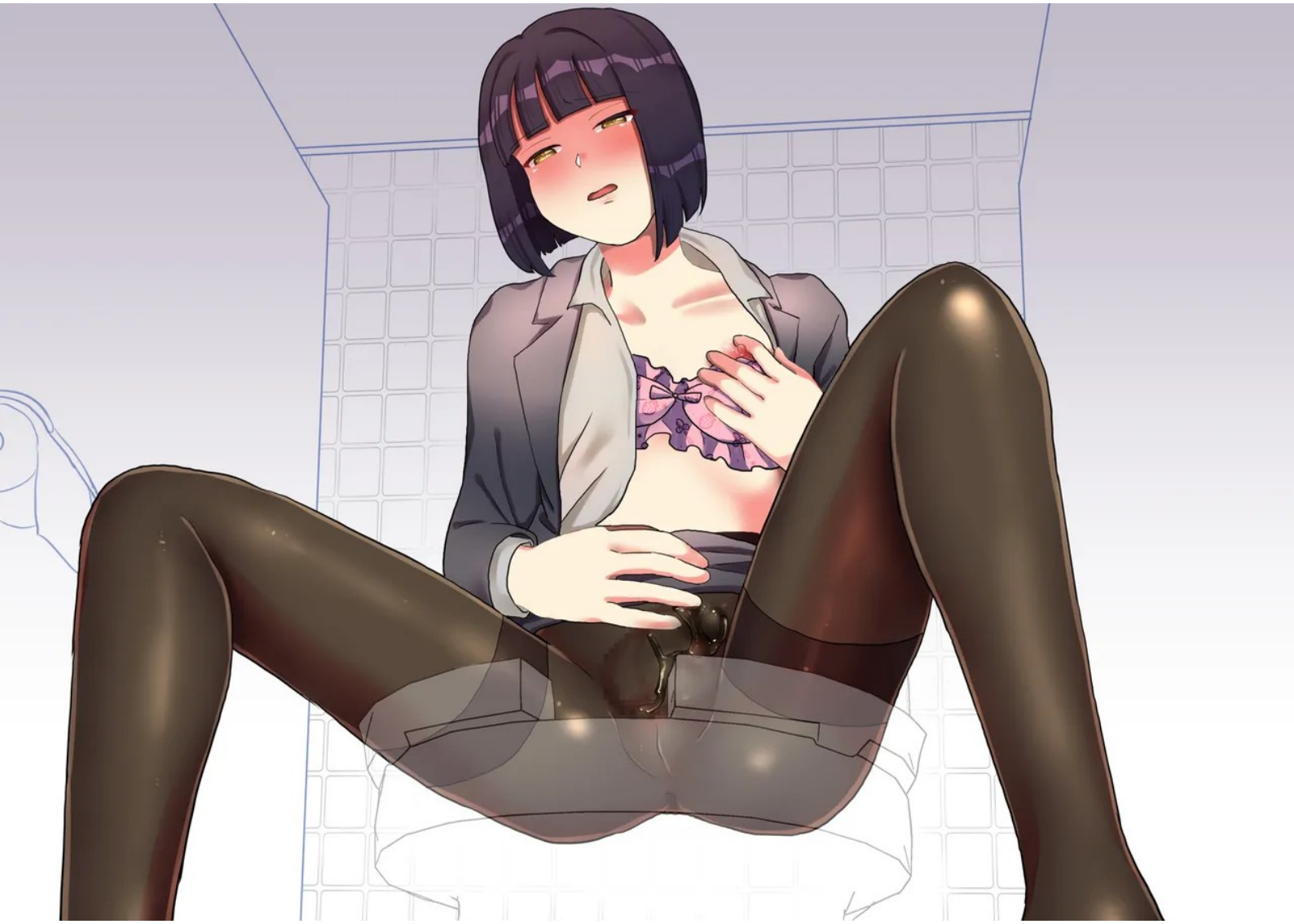
第一話 終

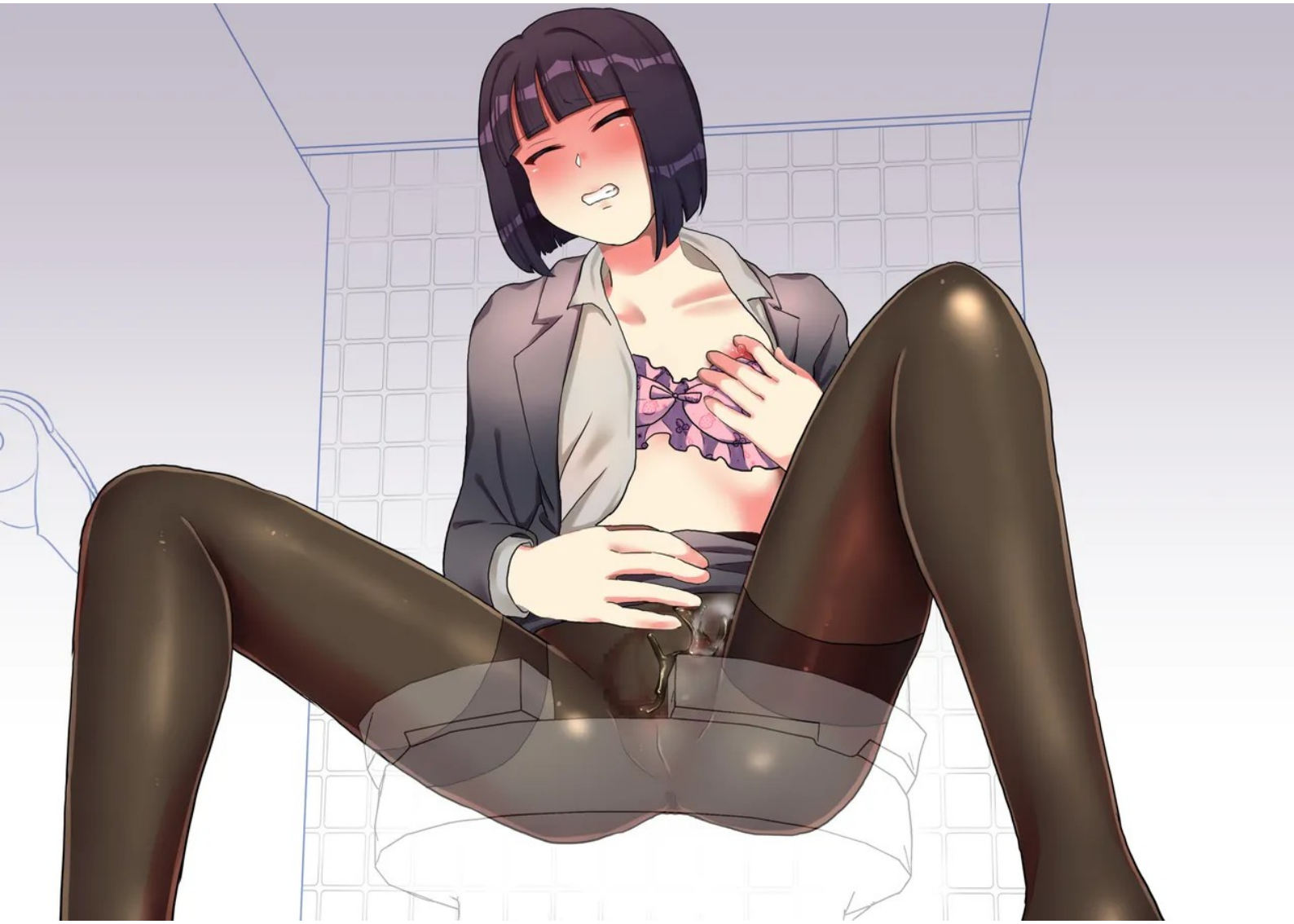
市民課

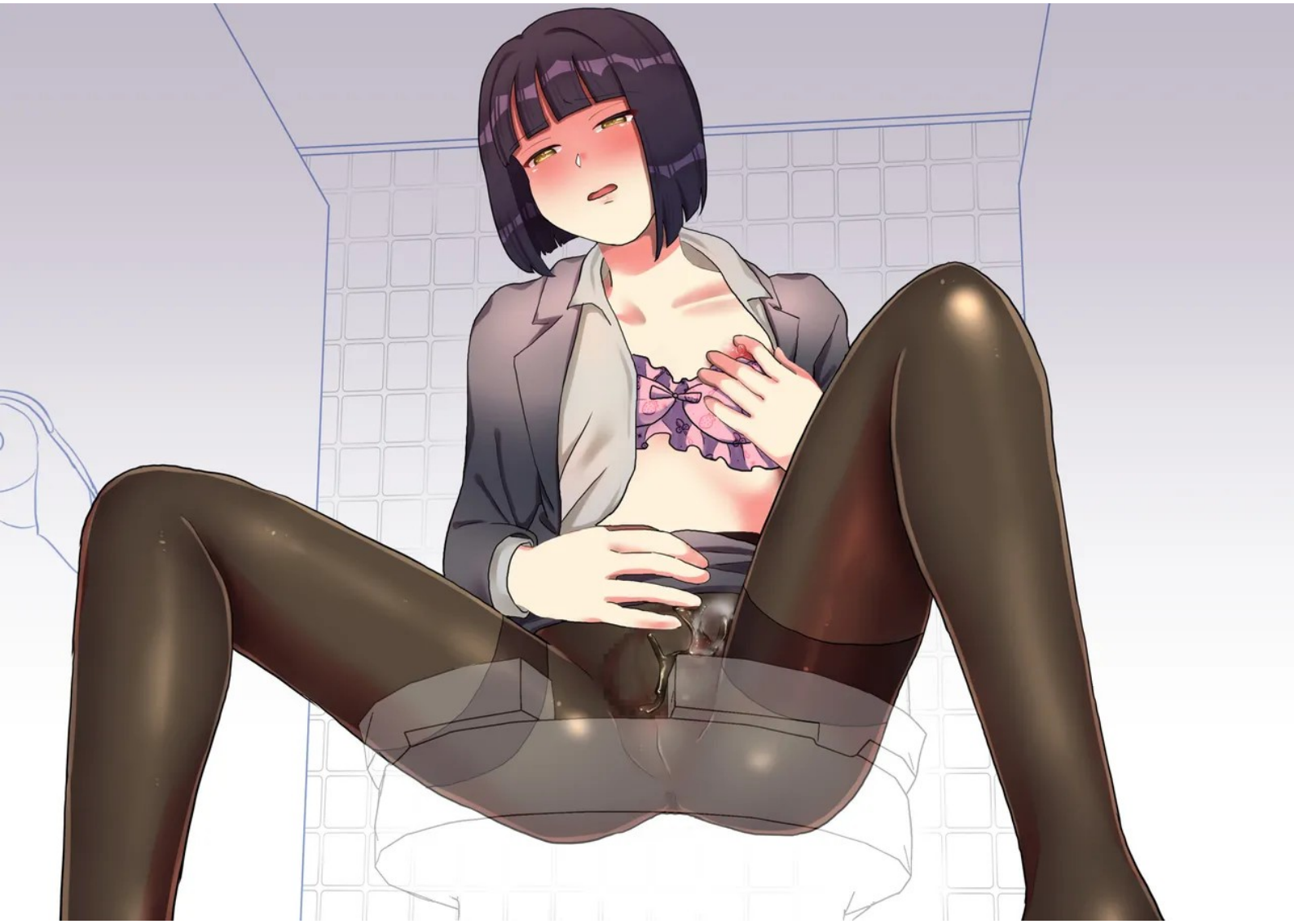
市民課

市民課

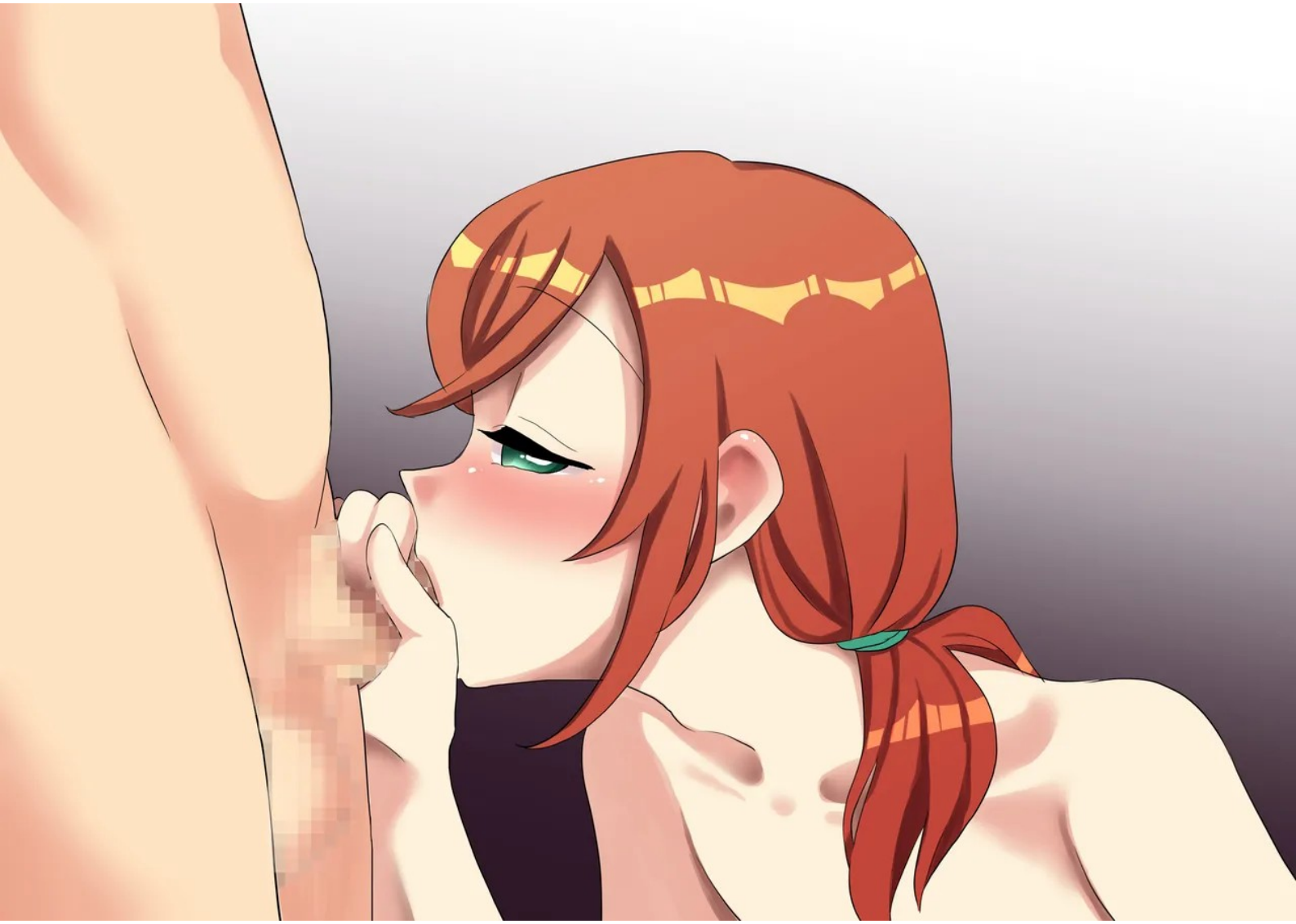


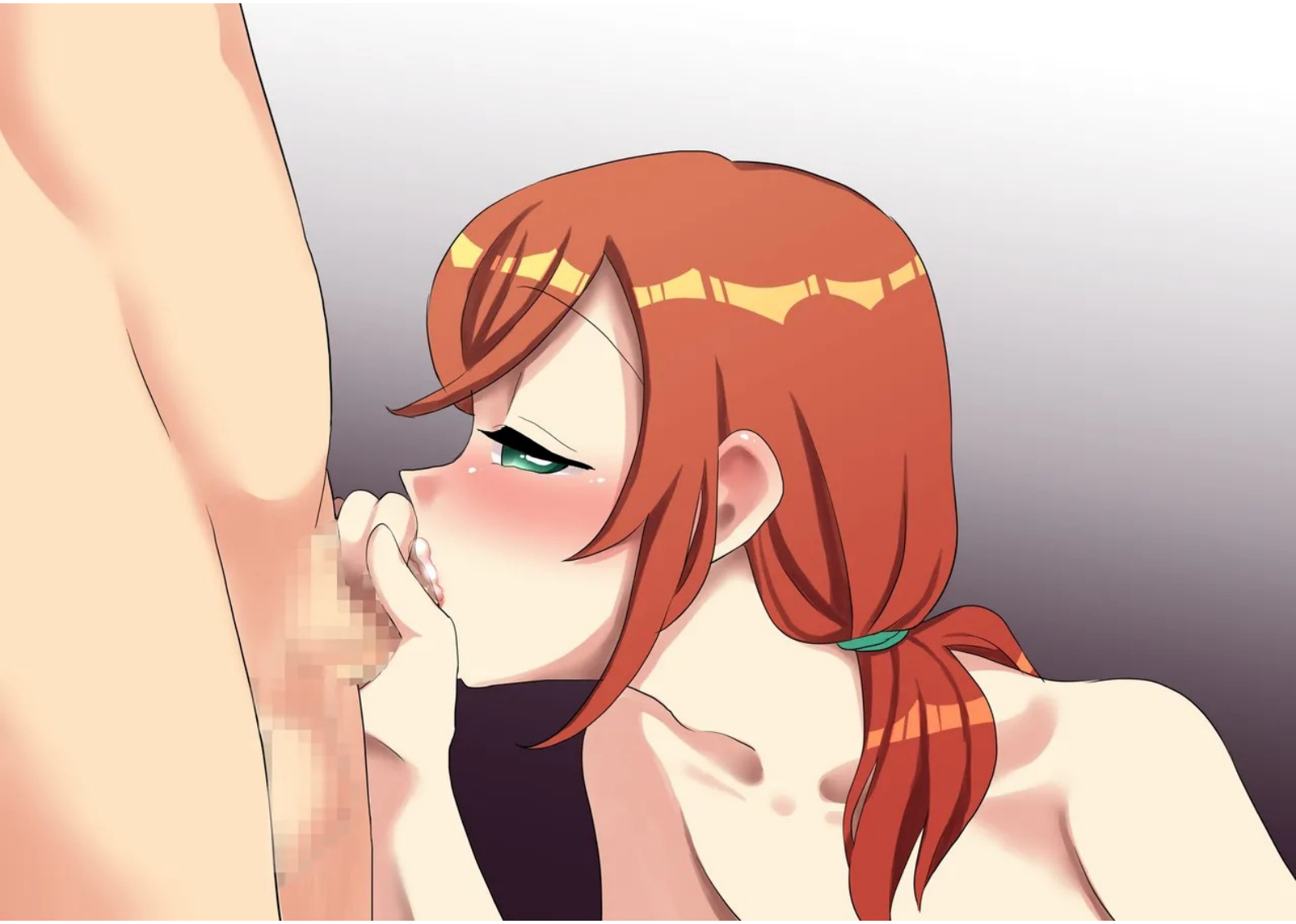


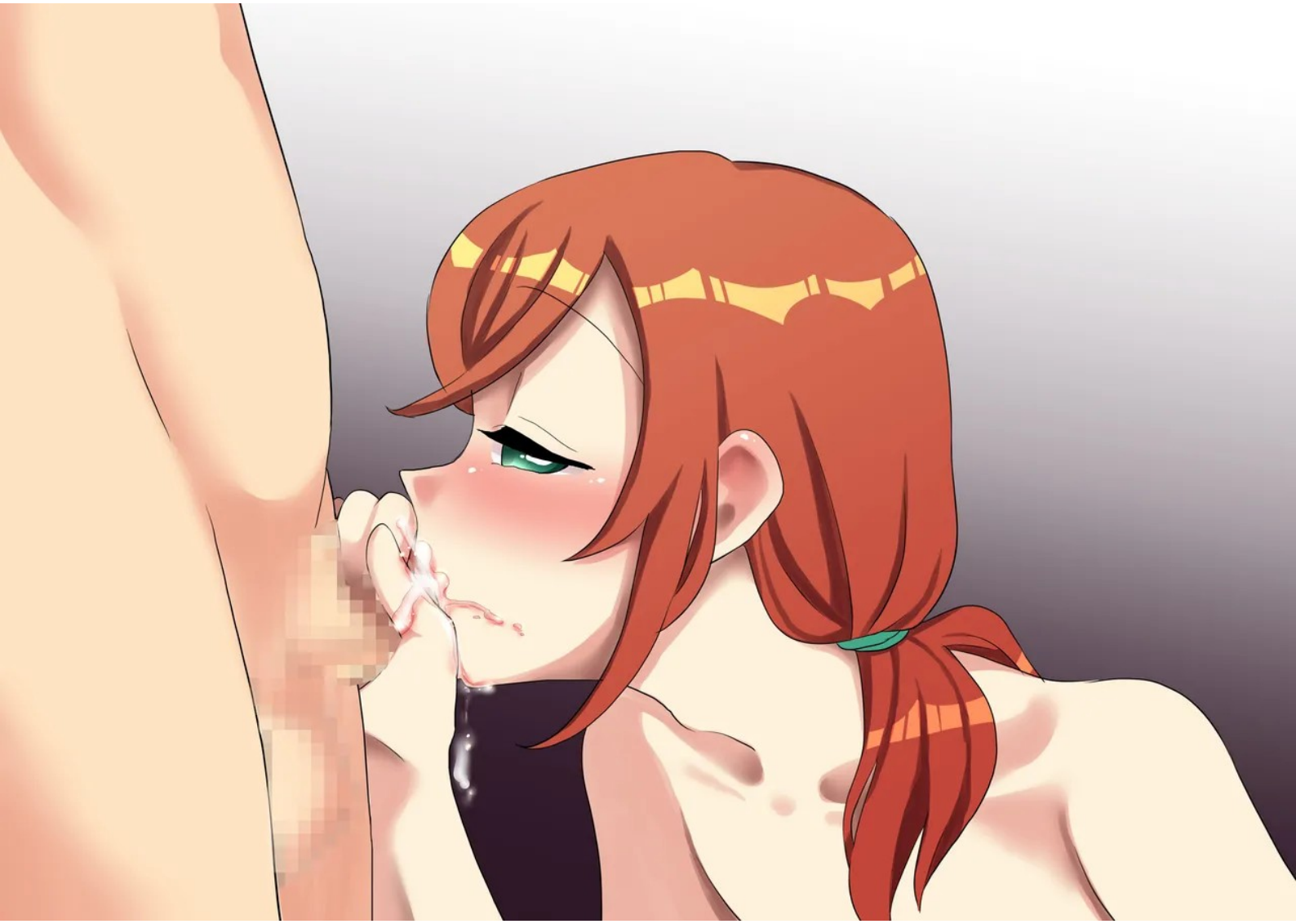


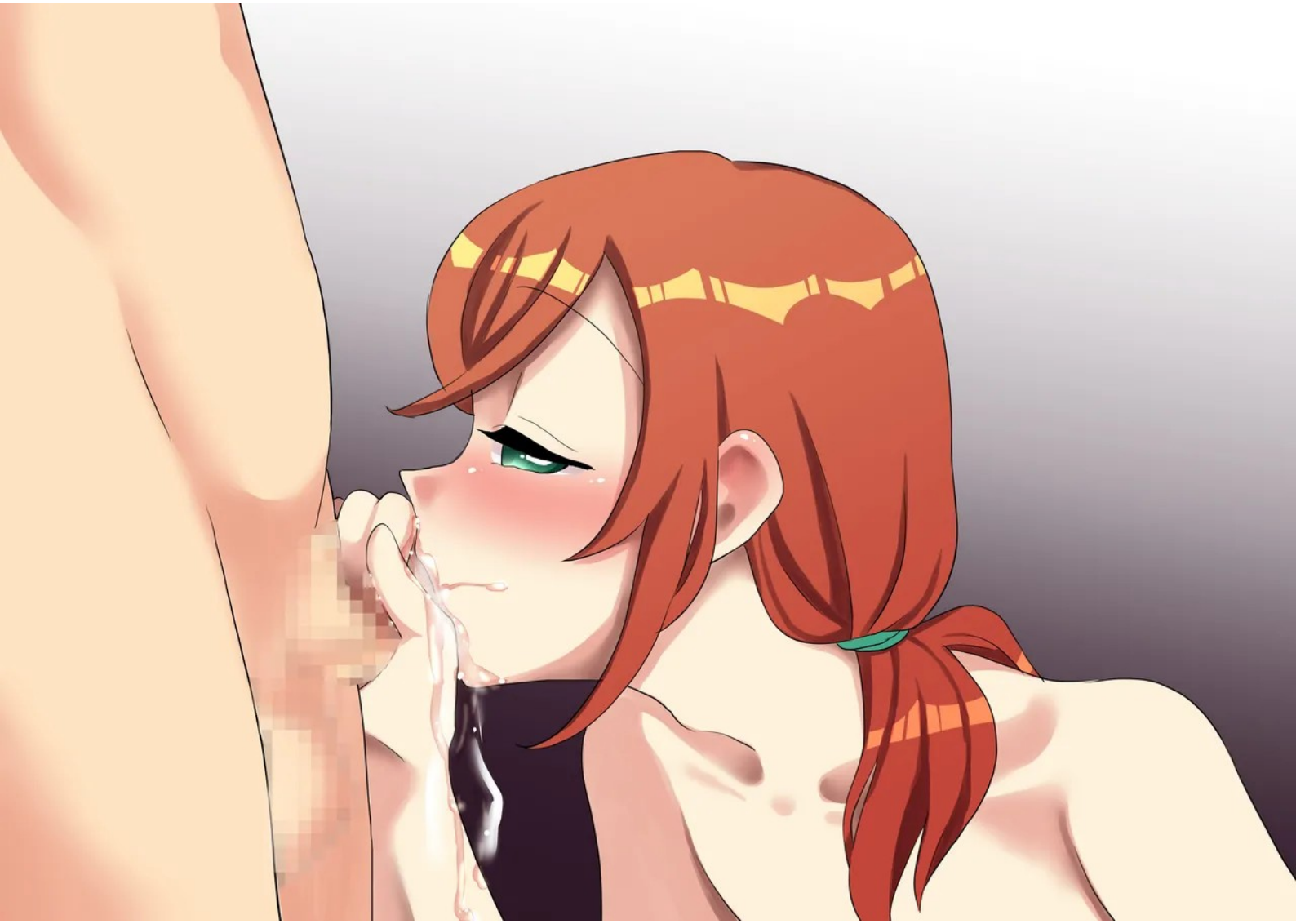


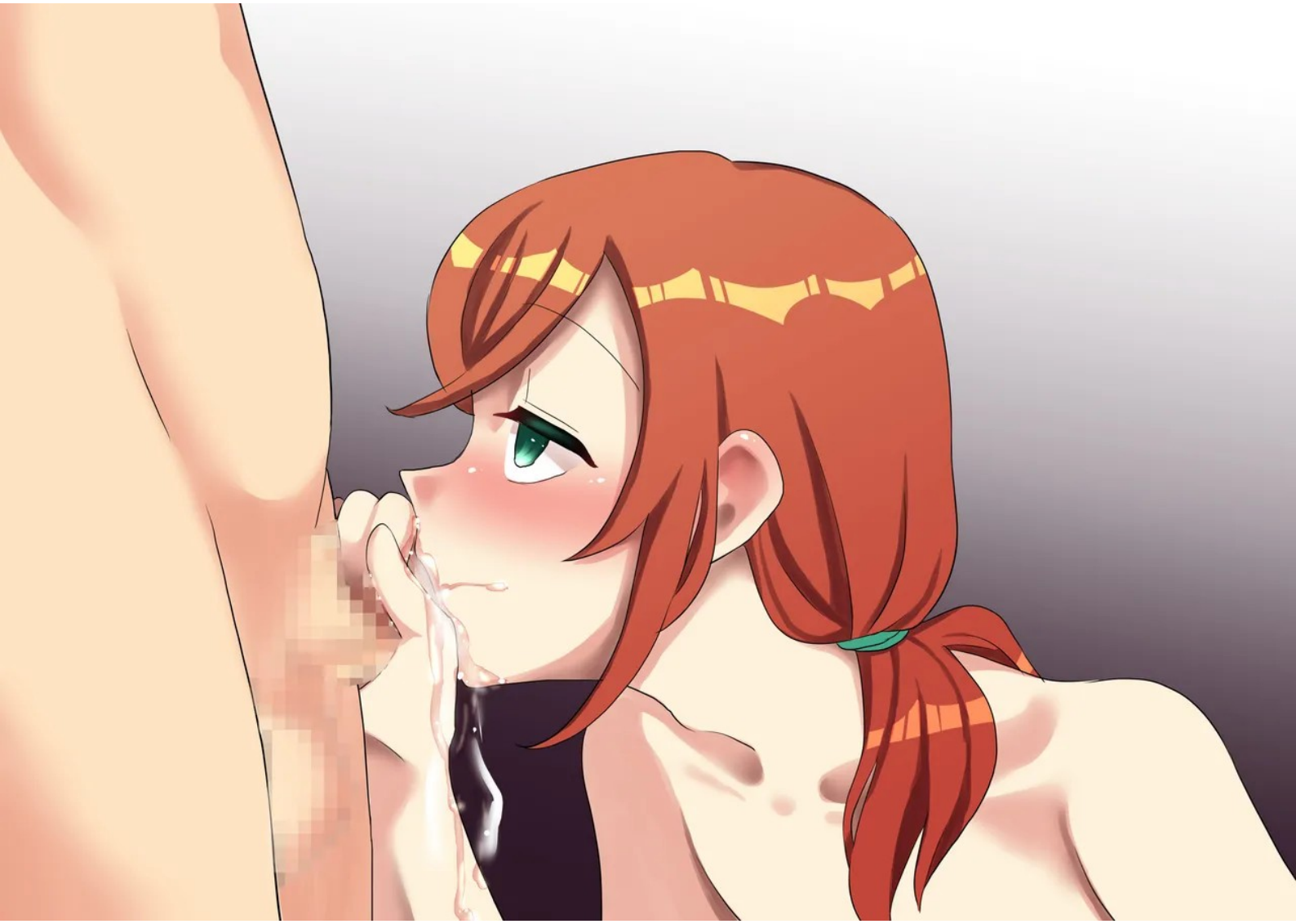
生活課

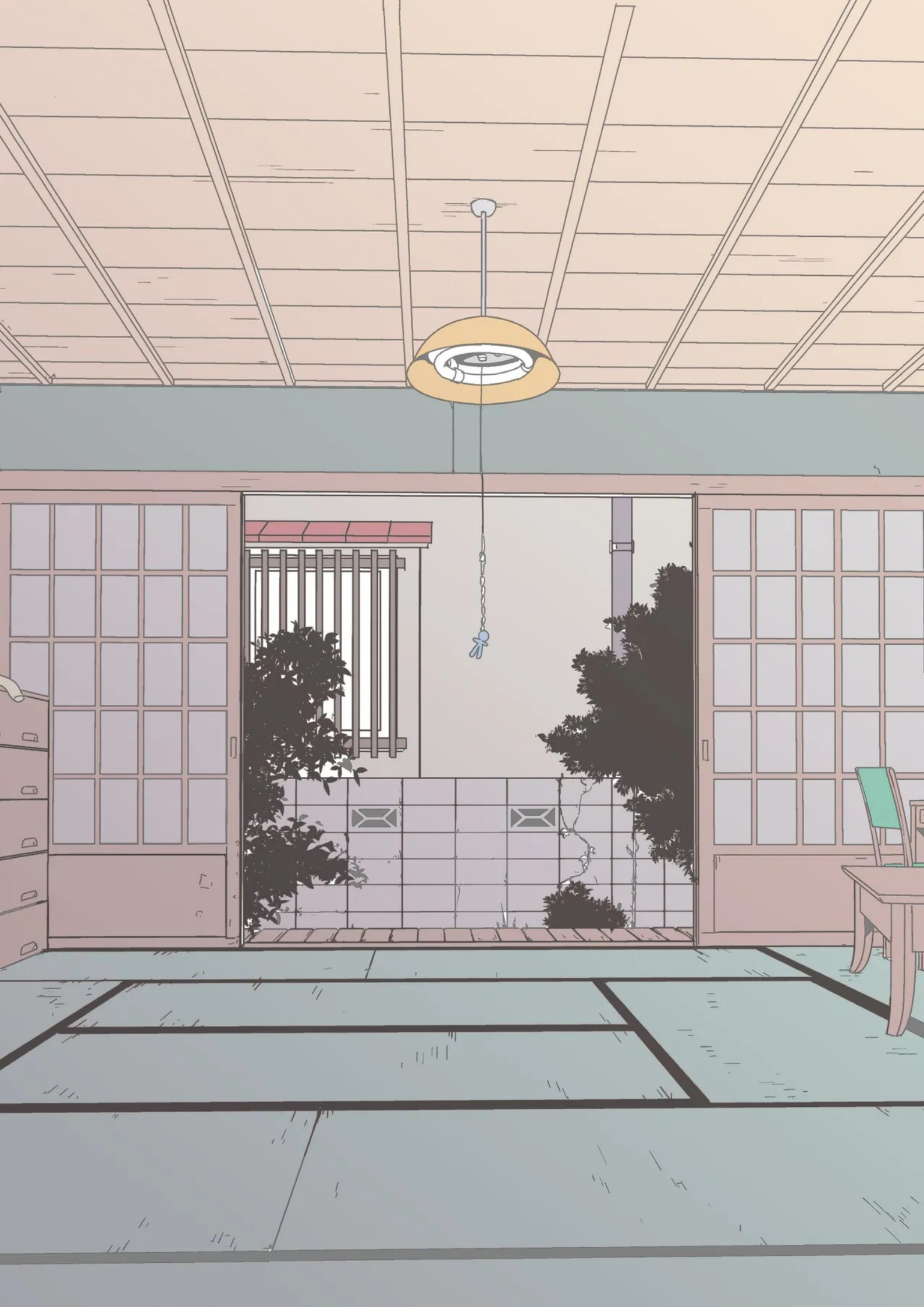


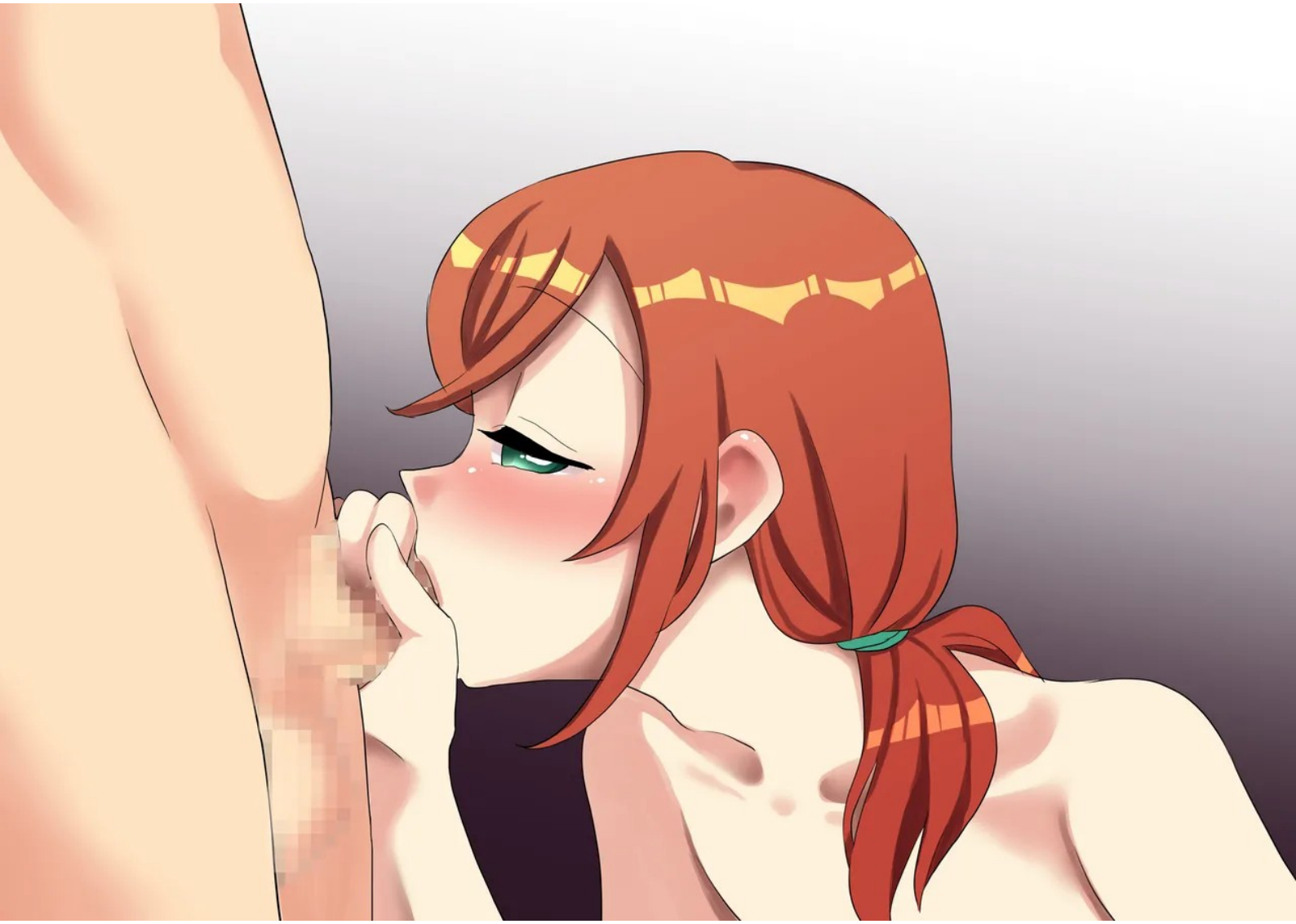


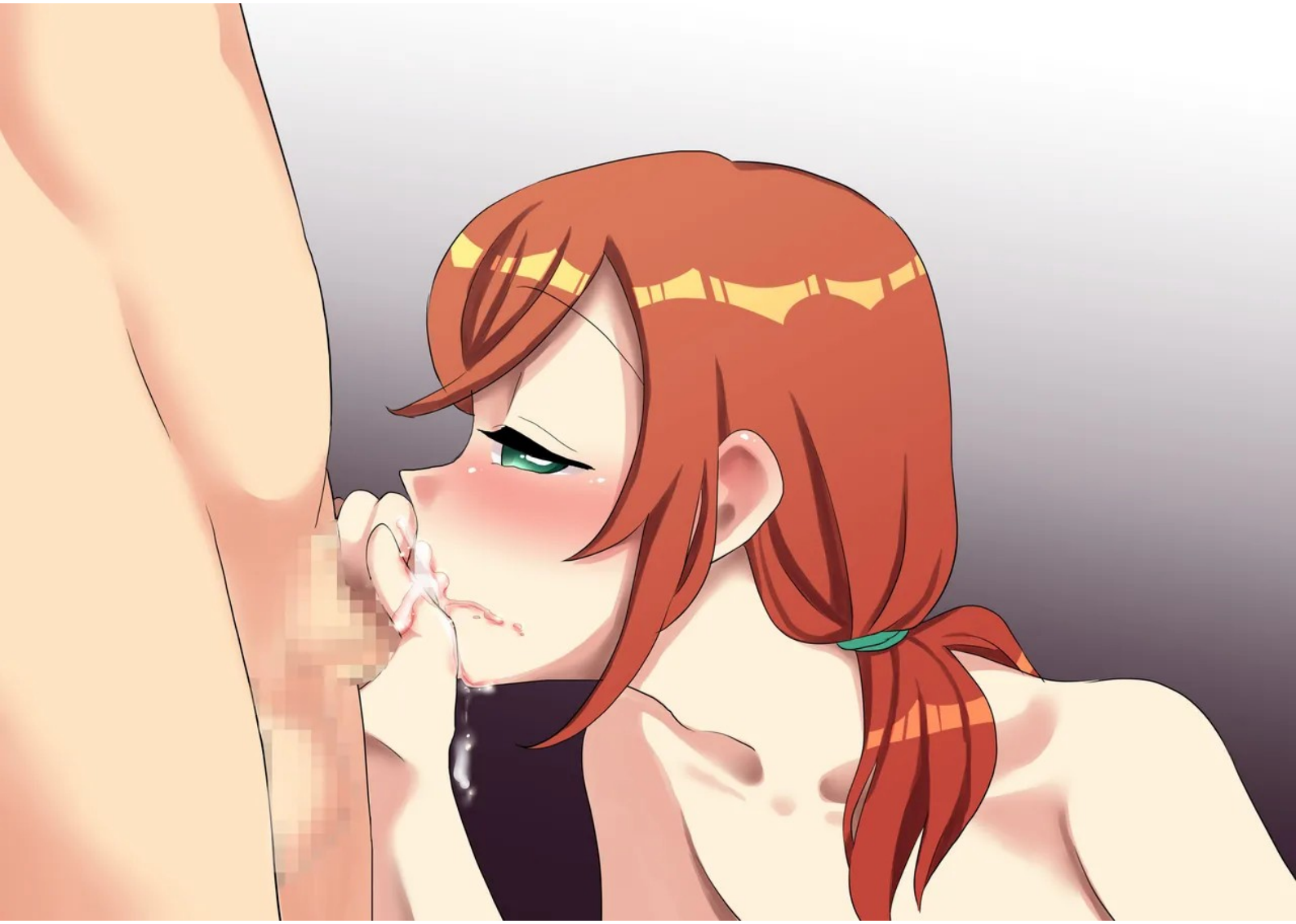


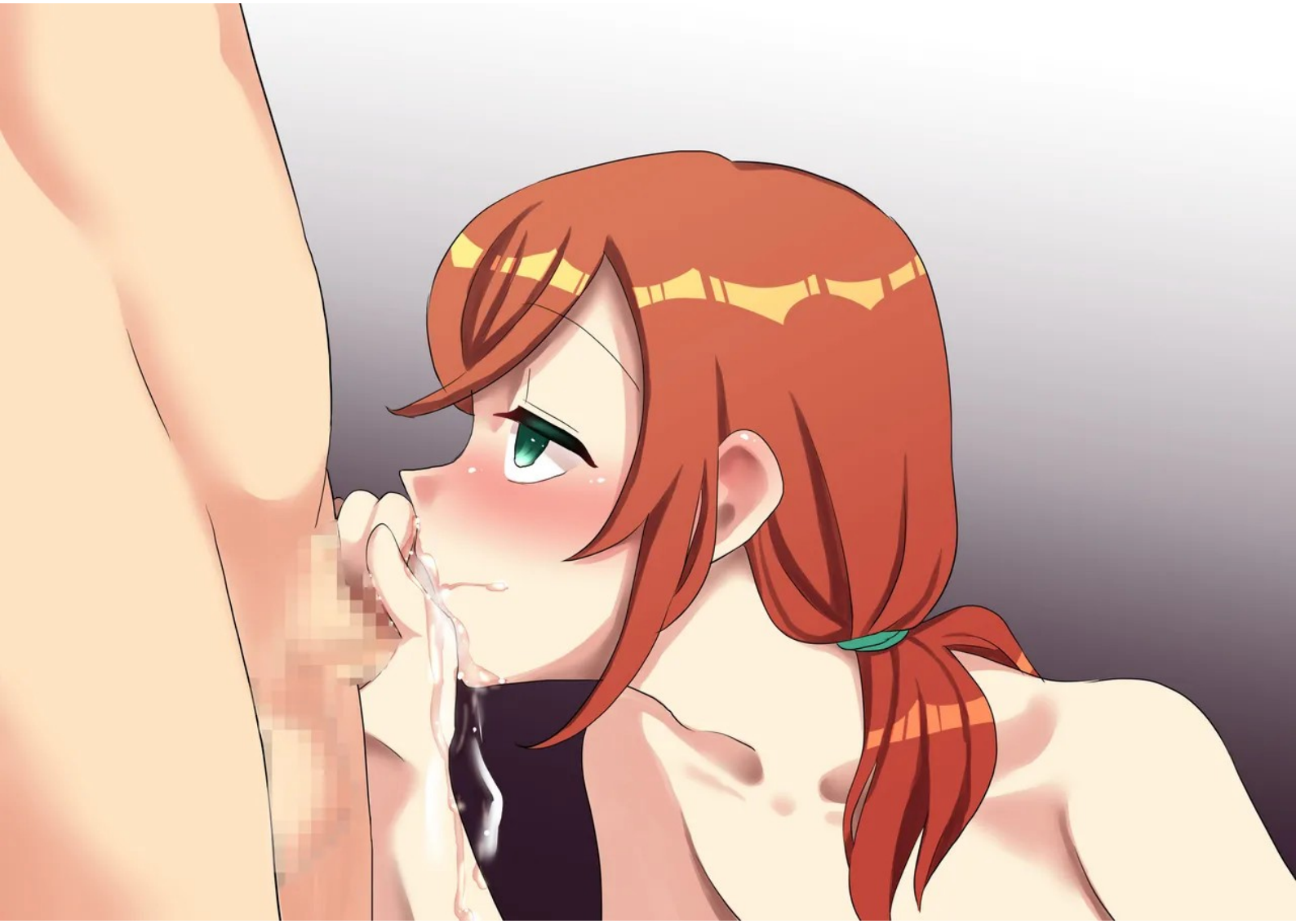


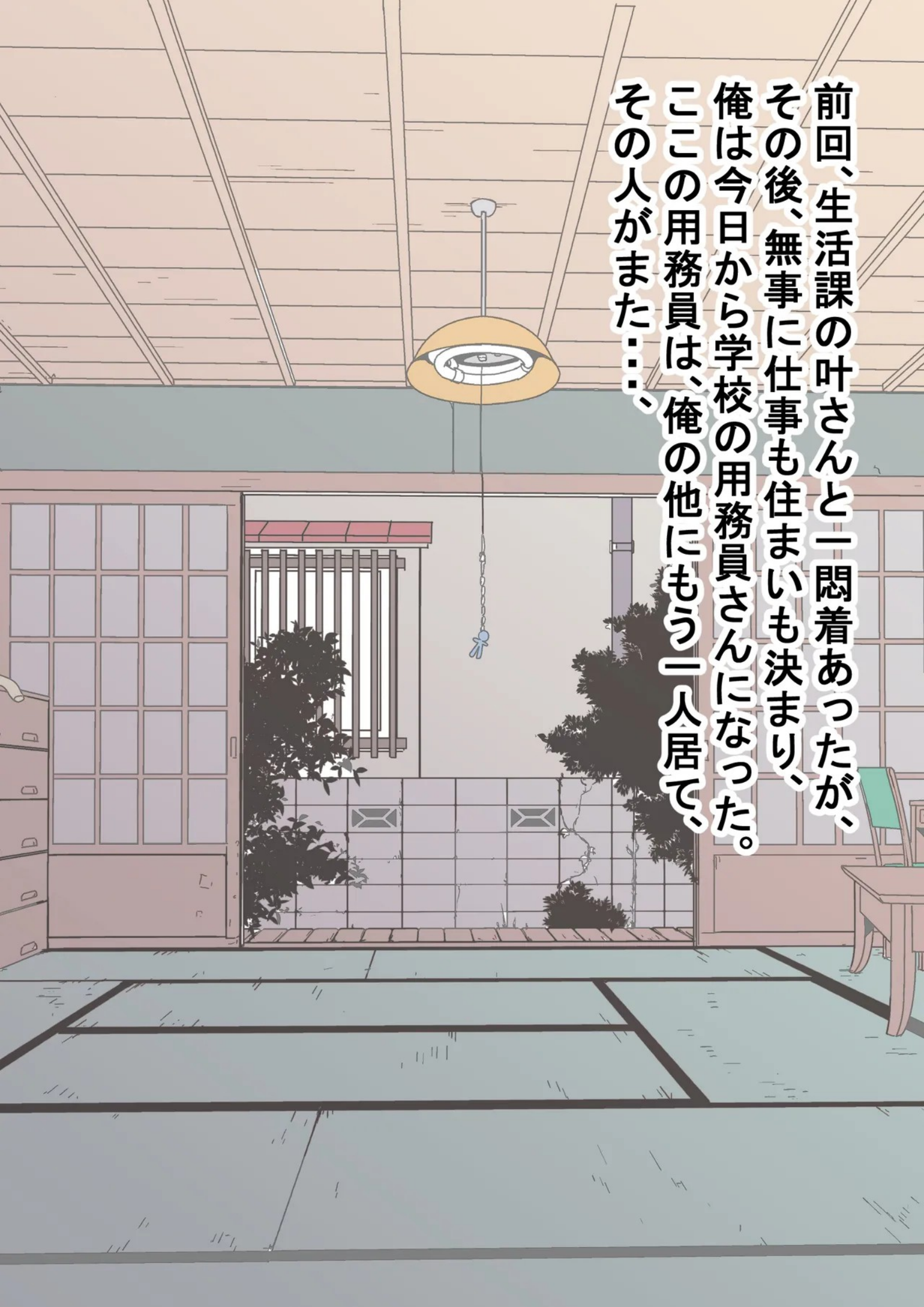











前回、生活課の叶さんと一悶着あったが、
その後、無事に仕事も住まいも決まり、
俺は今日から学校の用務員さんになった。
ここの用務員は、俺の他にもう一人居て、
その人がまた・・・、

「今日はお疲れ様！多田くんのおかげで、予定より早く終わっちゃったよ、ありがと❤」
「あ、いえいえ…。」
彼（彼女？）は日暮 燈子さん。
叶さんに続き、驚くほどカワイイ男の娘だ…。
そう、俺はもう、
『この人は本当に男性なのか？』
という初心者的な疑問は抱かない。
それは叶さんとの一件で十分わかったからだ。
それに……、

「多田くんさあ～、
さっきから私のコトじっと見てるけど、なーに？？」
「あっ！す、すいません…！別に…何も…！」
いや、俺は、燈子さんの透け乳首に釘付けになっていた。
「わかった！本当に男かって疑ってたんでしょ？」
「い、いやあ…（アレ？なんかこの流れ前にも…）」
「いいよいいよ、照れなくって。
おっぱいが無いの、見せてあげよっか。」
「えっ！」

バサッ
「わっ…！」
「ホラ、どう？オトコの胸板でしょ？」
俺はすぐ勃起したのがわかった。
「あれえ～？多田くんもしかしておちんちん勃っちゃった？」
「いや！あのそのこれは…！」
「いいよいいよ、舐めてあげよっか。」
「へ…!!」

「わはは❤けっこーおっきいんだ❤」
「そそそ、そうなんですか?!」
「女の子に言われたことないの?」
「あー…いや、えへへへ…(童貞は黙っておこう…)」
燈子さんは、パンツの上から俺のチンポに頬ずりしてきた。
俺は、一気にチンポが固くなったのを感じた。

「(うっ！やべ、先走り汁…!!)」
「あらら、えっちなお汁が染みてきちゃってる❤」
「す、すいません…！」
「やだなー、これからもっといっぱい出すんでしょ？なに謝ってんの？？」
うん、俺、燈子さんで絶対童貞卒業する。
こんなにエッチでカワイイ子が、今俺のチンポに顔くっつけてる…。
最高だと思う。

ギンッ!!
「あは❤思った通り❤
おっきくてギンギンだね❤」
「は…はい…!」
「忙しくてオナニーもしてなかったの？
精液袋もぱんっぱんでせりあがってるよ？(笑)」
「え、ええ…まあ…(昨日叶さんの裸で3回抜いたけど…)」

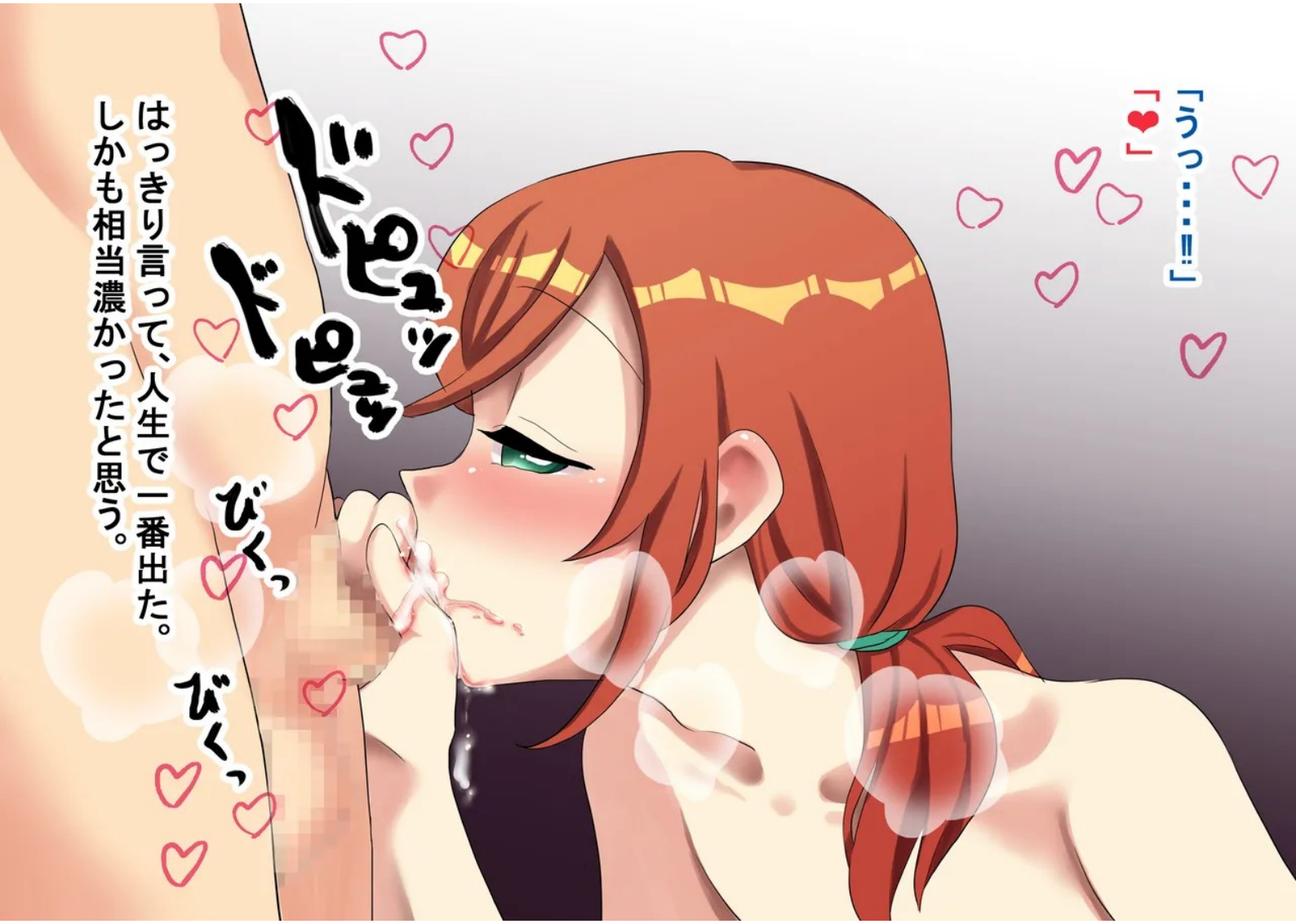
「わっ！」
「…ココの精液、ぜ～んぶ出していいからね❤」
「と、燈子さん…///」
燈子さんは金玉を優しく舐めてくれて、
とめどなく溢れ出る我慢汁をお掃除（？）してくれた…。

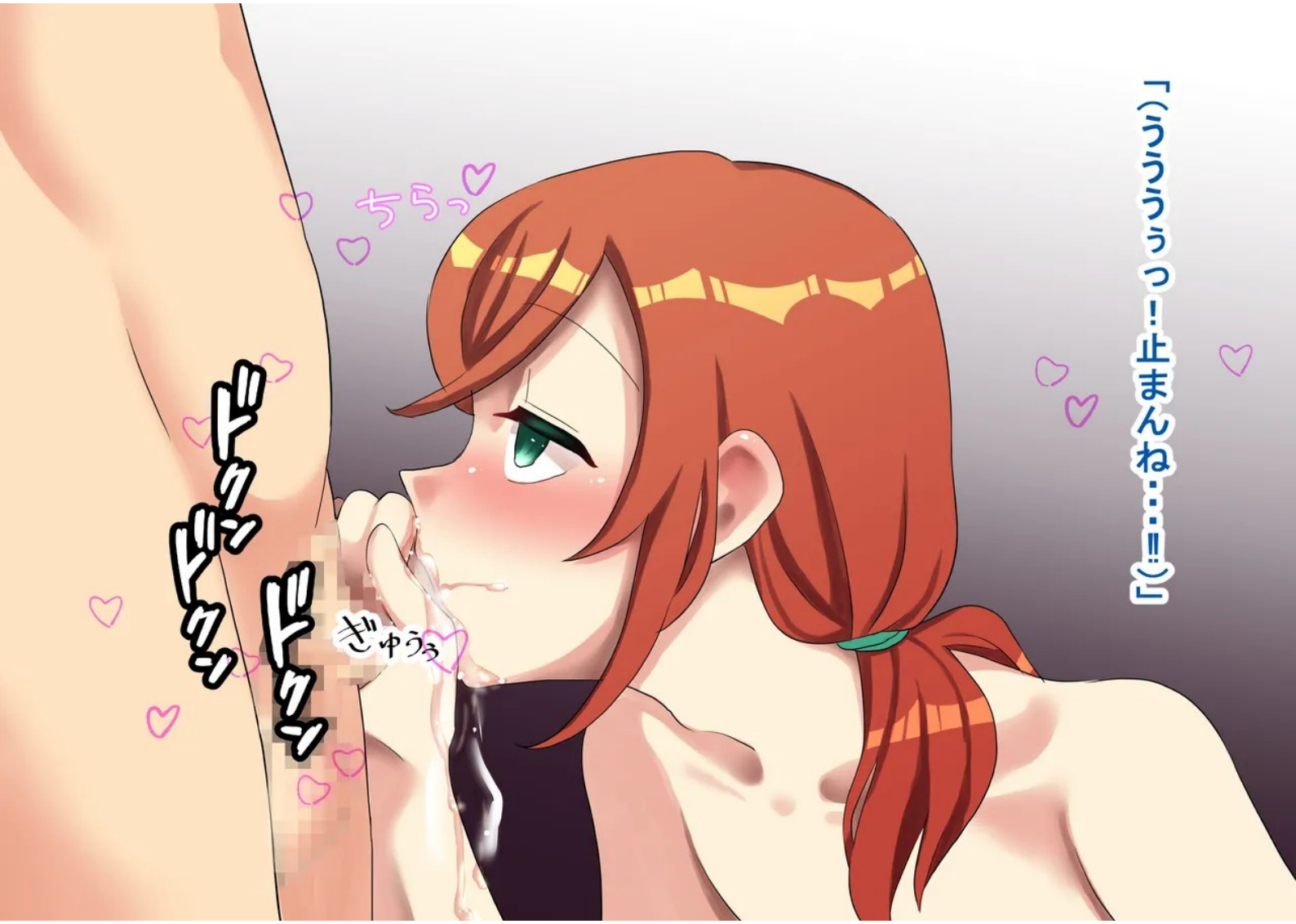
「わ～、すっごーい❤亀頭ズル剥け❤真っ赤にして期待しちゃってる…かわいー❤」
「あっ///」
つんっ
つんっ
ビクッ
ビクッ
「亀頭もすっごいおっきいね、ココ責められるの好き？」
「あ…、はい…、もう、なんでも…///」
「ふぅん～❤」
確かに、亀頭はオナニーでもふんだんに責める方だ。
見る人が見ると、わかってしまうのか…。

「(ちゅっ♥)それじゃあ、いただきまぁーす♥♥」
「ああっ///」
チュッ
ビクッ
唇がとにかく柔らかい…！
触れているのかいないのか、
わからないほどふわふわで温かくて…！
これで口の中に入ったら…一体どんな…！

「んむ…」
「(う、うわあ!!くちの中…あったけえ!)」
唇と舌で敏感な亀頭を舐られて、
すぐにでもイきそうになる…!
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶっ
じゅぶ
じゅぶ
じゅぶ
「はっ…! 燈子さ…っ! すご…っ」
じゅぶじゅぶと音を立てて、
亀頭を吸ったり舐め回される。
我慢汁がドクドクと止まらない…。

「(う、うおおお…っ!!!!)」
「ふっ、ふぅ、ふ❤」
こ、こんなにカワイイ子が俺のオレをおくちで
こんなに…!!
これはヤバい…!!
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ
ぐぽっ


「うっ・・・!!」
「❤」
ドピュッ
ドピュッ
びくっ
びくっ
はっきり言って、人生で一番出た。
しかも相当濃かったと思う。


「(うううぅっ！止まんね・・・!!)」
ちらっ
ドクン
ドクン
ドクン
ぎゅうぅ

「と、燈子さん！
もう、もうくち離して…」
「んっん、あって？（ちょっと、待って？）」
「うっ…！」
もご
もご
シコシコ
くちゅ
くちゅ
シコシコ
くちゅ
くちゅ
たら～
ん…♡
燈子さんは俺のを咥えながら、
自分のをシゴきはじめた。

「んっ♥う♥」
「ううっ！」
ビクンッ
ドクッ
ぴゅうっ
燈子さんの射精と同時に、
俺は再び燈子さんのくちの中に
射精した。
今度はそんなに量は無かったと思う…。

それにしてもすごい…、
こんなにカワイイのに、俺と同じモノがついていて、
しかも…、当たり前だけど…、ちゃんと射精してて…。
先っぽから精液が糸引いてる…、
めちゃくちゃエロいぞ…!!
男同士って尻の穴使うんだよな、
俺、ちゃんと出来るかな…、
やっぱり童貞だって言った方がいいかな…。
様々な思考を張り巡らせて脱童貞に備えていたのだが…
キーン
コーン
カーン
コーン

「あはは、チャイム鳴っちゃった❤
という事で今日は就業です❤」
「えっ！」
「また明日、8時半頃に来てください❤」

そう言って燈子さんは、すぐに服を着て帰り支度をし始めた。
俺は丸出しでしばらく呆けていたが、仕方がないのでそのまま帰った。
とんでもないところでお預けを喰らってしまったのだった…。

第二話 終